

心の輪12R



『夜のくだもの屋』という資料を通して、 「心のあたたかさ」について考えました！



☆「あかり」の数は？

この物語には、いくつの「あかり」が出てくるのだろうか？◆くだもの屋さんのお店の「あかり」。
◆毎日夜道を帰っていく少女を気遣って、店のあかりを消さずにいようと申し出た店のご主人の心。
◆この意見に賛成した奥さんの温かさ。
◆毎日夜道のくだもの屋の前を通るときに、そっと感謝する少女の思い。
◆少女のお父さんの感謝の気持ち。他にもたくさんあるかもしれない。

親切とは、相手に優しく思いやりのあることだと分かりました。今までしたことは、買い物した物を家まで運んだり、ゴミを捨てに行ったりしたこと。お母さんにしてもらっていることは当たり前だと思っていたけど、親切だということが分かりました。

お母さんがご飯を作ってくれる。お小遣いをくれる。お父さんが旅行に連れて行ってくれる。当たり前のように当たり前じゃない優しさ。図書館でバラバラに置いてある本を並び直している知らない人は、誰に何を言われなくてもして親切だと思う。

この授業で、日々、優しさが溢れているんだなと思った。みんなに見えないところで優しくしている人がいるのではないかなと思う。例えば、町を綺麗にするボランティアは町に親切にしているようなものだと思う。人だけではなく、町とかにも親切にしていきたい。

「あたたかい」とは、安心や優しさから生まれるものだと思います。自分が知らないところでも親切にされていることが分かった。

『優しさ』という言葉であっても、自己満足の優しさもあり、優しさには種類があることを知りました。だから、私は自己満足のためではなく、相手の気持ちを考えて相手を支えたいです。

親切とは、自分が気付いていない所でしてもらっていることもあるということが分かった。また、自分が暮らす中で見えない親切はたくさんあると思うので、色々なことに感謝したいと思った。

ある大雪の日

雪の多い年のこと。豪雪にみまわれたある日。
鉄道は不通になり、通行止めの道路は立ち往生の車が数珠つなぎ。
そんな中でみつけた、一期一会、心のふれあいの風景。

おにぎり
住民から差し出されたおにぎりを、ドライパーが窓越しに受け取る。「名前は」と何人も尋ねたが、住民たちは「なんも、いいってば」とかわし、長く伸びた車列を縫って、おにぎりとお茶、漬物を配り歩いた。四日深夜からの記録的な大雪で、翌五日夕まで通行止めが続いた八郎湯町真坂の国道7号での出来事。

「腹の足しに」とおにぎりを握りだすと、夫に「それじゃあ足りない」と言われた。外に出ると南北に長い車の列。お向かいさんにも声を掛けて米を炊き、夫らとおにぎりを配った。車内の女性には家のトイレを使うよう申し出た。

列車の乗客を代行輸送中の大型バスの手前でおにぎりがなくなると、自宅に戻り、さらに近所の四軒に呼び掛けた。車が動きだす昼すぎまで、最初の主婦は米一升八合を炊き、お向かいさんは一升六合を供出した。主婦らが住む十九区町内の隣の二十区町内にも炊き出しの人がいたことも、後で分かった。

その一週間後、町役場にお私の電話があった。ラジオでも話題にされた。主婦らは、町から「広報紙に顔写真を載せたい」と頼まれたが、断るつもり。当方も同様のお断りをしたが、「自分たちも気持ちよかったんだから、いかつい顔の男性が車から降りて、何度も頭を下げてくれたし」と笑ってかわされた。最初におにぎりを配った主婦は「一緒に炊き出ししてくれた人が近所にいたことがうれしい」と話した。多数の犠牲者が、出ている今冬の豪雪だが、その陰にこんな話もある。

『中学生の道徳1 自分を見つめる』
(出版：あかつき) P.89より引用